

もエネルギ―を蓄えてい
た例は後にも先にもあま
り見当たらない。明治・大正・昭和初期、
甲州の若者たちは「灯り
と乗り物」に鼓舞されて
新興国日本のニュービジ
ネスを開拓していった。
そのほんの一例を挙げれ
ば、東京電力（若尾逸平、
佐竹作太郎、小林一三）、
東北電力（根津嘉一郎）、
北海道電力（穴水熊雄）、
創業ではないが中部電力
（進藤武左衛門）等々、わ
が国の電力事業を創始し
た人々の中に甲州人の比
率が際立って高い。明治40年（1907）

に果たした役割は今考
ても「無限」という以上
の表現は不可能だ。駒橋
発電所の電力は、灯りか
らエネルギーへと変貌
し、電車を動かして、人
物資を運ぶこと近代産
業の扉を開いていった。
甲州財閥のもう一方の
巨魁雨宮敬次郎や根津嘉
一郎らは、「灯り」の成功
を「乗り物」に応用して、
甲武鉄道（現中央線飯田
橋）八王子の国電区間）
東武鉄道、南海電鉄など
を創業していった。また、
早川徳治は地下鉄（現東
京メトロ）を創業したし、
小林一三は私鉄の勇・阪
急電鉄を育て、小野金六
や堀内良平は身延鉄道や
富士山麓電鉄を、河西豊
太郎はこのように甲州の全
年の手にかかる鉄道は全
国100余社に及ぶ。いな
い。乗り物は鉄道に限ら
ない。創業ではないが、浅
尾新甫は日本郵船、小
佐野賢治はバスと飛行機
輸送を手掛けた。彼らに
も甲州財閥の掲げた「灯
りと乗り物」の遺子が
確実に染み付いていたか
ら、今時代は未曾有の変
化の中心にある。人々は
その速さに着いていく。こ
すく代には明瞭な日本語
時代には代を瞭る。日本語
操って能力のある指導者
だけが必要だ。ある指
導者（斉藤芳弘著『甲州財閥
物語』（山梨新報）参照）